



＜同志社人が母校を誇りに思える情報＞

「同志社ファン・レポート」

Ver. 2-031 号

「新島先生にとって函館とは」

－ 海外渡航の地 碑前祭に因んで －

(投稿：宇治郷毅元社会学部教授)



＜宇治郷毅（うじごう・つよし）氏のご経歴＞

1943 年岡山県生まれ、1966 年同志社大学法学部卒、1968 年同大学院法学研究科修士課程修了、2003 年国立国会図書館（副館長にて）退職、2007～2013 年同志社大学社会学部（教育文化学科）および同大学院社会学研究科教授、2013 年叙勲（「瑞宝重光章」）受賞、主著：『詩人尹東柱への旅』緑陰書房 2002、 『石坂荘作の教育事業』晃洋書房 2013」

【新島先生にとって函館とは】

－ 海外渡航の地 碑前祭に因んで －



## 1. 函館がもつ意味

新島にとって函館は次の三点で、きわめて重要な場所と言えます。それは一つには、函館が海外遊学（留学）の第一関門である脱国（密航渡米）の実際の舞台になったこと、第二は、その後の「生き方」を決定する出発点になったこと、第三は、生涯にわたる多くの親友、恩人を得たかけがえのない場所になった、ということです。

伊藤彌彦氏（同志社大学名誉教授）は『のびやかにかたる新島襄と明治の書生』の中で、新島の脱国までのプロセスを「飛躍」とよび、それを「二段ロケット方式」にたとえています。それは江戸の藩邸から函館への脱出が一段目のロケットで、函館からアメリカへの脱出が二段目だというわけです。そして氏は二段目も重要としながらも、それ以上に一段目の重要性を強調しています。私は二段目、つまり函館脱出（とそれに続く航海）の成功が決定的に重要と思うのですが、ともあれどちらのロケットもかろうじて「点火」に成功し、無事目的地に到着することができました。この成功は新島の努力もさることながら、強運をこえて私には奇跡のように思えます。新島は最初の成功の喜びを「嗚呼天我を棄てざるか」と叫んでいます。私にも「天」が新島に味方したとしか思えません。

脱国の状況については多くの人がいろんな角度から述べているので割愛し、恩人たちについては後述します。ここでは、新島の「生き方」について触れておきます。それは、新島は終始「志」に生きた人であった、ということです。この志という言葉は、新島が国禁を犯して脱国した函館港の岸壁に立つ「新島襄海外渡航乗船之处」碑の新島の漢詩に刻まれています。「男兒決志馳千里（男兒志を決して千里に馳（は）す）」というものです。新島の生涯は、この言葉のように、青年の時から死の瞬間まで志（ほかでは「宿志」「素志」「千里の志」「蓬桑の志」とも表現）の実現のために世界に「馳せた」ものでした。まさに「千里の志を生きた人」と言えるでしょう。また幕末の多くの志士は単に藩を脱出したのにすぎませんでしたが、新島の場合は他に例を見ない「脱国した志士」であったのです。

いま一つ函館が大事なのは、新島の生き方である「自治自立」の原点になったところであったことです。幕末、明治初めかなりの日本人が海外渡航していますが、すべて幕府（政府）か藩の命を受けたものでした。また少数ですが漂流の果て結果的に海外渡航となったケースがあります。しかし新島の場合、官にたよらず自分の才覚と努力のみによる渡航でした。この「自治自立」の生き方を新島は最後まで貫きました。

新島にとってその志は、偏狭な封建制度のくびきを脱し、西洋近代の学問とキリスト教を学び、「真正の開明文化と真正の自由幸福とを我日本国に来さんため」（「同志社設立の始末」というものでした。函館は、その志のために雄飛した出発点であったのです。

## 2. 函館での多くの初体験

新島は短期間の函館生活で多くの貴重な初体験をしました。

第一は、藩と親元の庇護を離れてはじめて自活したことです。苦勞知らず（新島自身が認めています）に育った新島は、すぐ生活の困難に直面しています。衣食住（最初旅館に泊まり、後にニコライの家に寄寓）もさることながら、金の大事さとその使い方がよくわからず無駄遣いをしてしまったようです。江戸を出る時持ってきた 25 両（藩からの修行料 1 年分 15 両含む）の大金を最後は 1 両 2 分に減らし、嘆いています。しかしこののがい体験は、新島にとってその後の長期にわたる自立生活の良い薬になったと思います。

第二は、函館ではじめて地方に住む庶民の日常生活に触れたことです。そしてその道徳的に墮落した風俗・社会状況（遊郭、強欲な商売、法外な物価高など）にショックを受けています。ここから新島は「日本が必要としているのは、単なる物質的な進歩よりも道徳的な改革」（「私の青春時代」）であることに気づきます。欧米の物質文明導入が絶対視されていた当時、このように精神面の改革に目を向けたのが新島らしいと思います。

第三は、はじめてささやかながらも西洋近代の事物に触れたことです。国際貿易港になったばかりの函館港に出入りする英、米、仏、露などの多くの欧米の商船（帆船、蒸気船）をはじめて見えています。また港の各国商館や函館山の麓に立ち並ぶ洋館（領事館）、キリスト教会（ハリストス聖堂）などの近代建築をはじめて見て、その美しさに目を見張っています。このような西洋文明との実際の出会いは、ささやかなものであってもその背後にある欧米先進国への関心とあこがれを新島の心にもたらしたものと思います。

第四は、外国人に初めて出会ったことです。ロシア領事館付のロシア人司祭ニコライと士官ピレルーヒン（新島の英語教師）、ポーター商会店主のイギリス人ポーター、ベルリン号船長のアメリカ人セイヴォリーなどです。これらの人達はみんな新島に親切でした。これは欧米人への親近感をもたせる契機になったと思います。

第五は、はじめて英語のネイティブスピーカーに接したことです。これは上記の英米人たちですが、新島にはその言葉は全然理解できませんでした。くやしい思いは英語学習への思いをより強くしたことでしょう。

第六は、西洋式の社会的（慈善）施設であるロシア政府の建てた近代的病院を始めて見学し、新島自身がロシア人医師ザレスケーに目の治療をしてもらうという体験をしたことです。そしてその設備の良さとどのような日本人にも差別なく無料で良心的な治療をすることに感心するとともに、日本の病院の在り方と日本政府の施策が遅れていることを批判し

ています。同時に、ロシアが慈善事業によって日本人の人心を掌握しようとしていることに警戒すべきだということをも述べています。この経験は詳述しているところから見ても、新島の西洋の文物・制度への学習意欲を一層かきたてる契機になったものと思います。

### 3. かけがえのない恩人たち

新島は、人生の岐路で多くの支援者、協力者に助けられています。また恩人と呼べる人もたくさんいます。その恩人の中でも、私は函館での福士卯之吉、アメリカでのアルフィーアス・ハーディー、京都での山本覚馬の三人がもっとも大事だと思います。

函館で英語教師をさがしていた新島に、長岡藩士菅沼精一郎はニコライを紹介し、また土佐藩士沢辺数馬（琢磨）を紹介しました。沢辺は、さらにポーター商会の店員で英語のできる福士卯之吉（成豊）を紹介しました。一方脱国の手だてを密かに探っていた新島に、もっとも大きな助けの手を差し伸べたのが福士卯之吉でした。福士は新島の志に感銘し、米国商船ベルリン号のセイヴォリー船長から乗船許可を取ってくれました。福士は新島の脱国の最大の恩人となったばかりでなく、生涯の親友となりました。

こうしてみると不思議な思いにとらわれるのですが、次から次に脱国につながる重要人物（恩人）が数珠つなぎのように現れています。この函館で得た四人、それに江戸から一緒に来た塩田虎尾、これらの誰一人欠けても脱国は成功していなかったでしょう。

ではどうしてこのような人たちは命がけで新島の行動に協力したのでしょうか。

第一は、新島が人の真贋を見分ける天性の目（慧眼）をもっていたことです。新島は、人の本性を見極める独特の能力をもっていたように思います。とくに人生の重大時にはその慧眼で真に自分の助けになる人を見事に獲得しています。函館での五人がまさにそうでした。

第二は、逆にこれらの人たちは新島の私心のない志と「誠意誠心」（新島の言葉）の態度に感銘しています。そこには、新島がもっていた人を引きつけ結びつける「磁力」のようなものが働いて、これらの恩人の義侠心をかき立てたのだと思います。新島はこれらの恩人に対して、「言語を以て謝しがたし」（「函館脱出の記」）という表現で感謝し、死の寸前まで厚誼を結んでいます。■